

令和4年度 いのちの授業 事例集（高校）【国語】

掲載数

14

管轄	学年	教科等	テーマ	内容	参考事項（講師・教材等）
1 神奈川県立	高1	国語	いのちの授業作文大賞	「いのち」をテーマにマッピング法を活用して発想を広げた。その中から「自らが経験したこと」「社会的事象等で関心があること」を中心テーマとし、三段構成の型を利用し、作文の構成を考えた。そしてこれまでに活用したJamboardを参考にしながら400字程度の作文を作成した。	
2 神奈川県立	高複合	国語	命の尊厳	国語表現の授業展開の中で、安楽死についての問題を取り上げ、ディベートを行った。その際、命の尊厳についても考えさせ、小論文に考えをまとめさせた。	過去のニュースを使用
3 神奈川県立	高3	国語	漱石『こころ』の登場人物たちはゲートキーパーになれなかったか	国語科の定番教材である夏目漱石『こころ』を扱う授業のなかで、自殺を防ぐゲートキーパーとしての役割を語り手の「私」が担うべきではなかったか、という評論に触れたうえで読解の授業を行った。併せて教科書所収の死をテーマにした作品も扱い、文学作品を通じて社会や個人の問題を考える方法について考えた。生徒の反応は概ね良好で、技能としての言語の活用に留まらず、社会と自己を接続し、思考を深めるための契機としての国語力について考えを及ばせていた。その後の授業での探究的な学習においても、いのちの問題について主体的に問題設定する生徒がおり、問題を提起する授業として一定の成果が得られた。	現代文B（3年）
4 神奈川県立	高2	国語	現代文B「こころ」	「こころ」は、「私」が友人であったKを裏切り自分の欲を優先させた結果、Kが自殺してしまい、その罪に対し生涯をかけて向き合っていかなければならなくなり、自分も自殺をするという話である。 本授業では、「私」とKのやりとりをもとに、自らの言動が相手にどのように伝わるのかについて考察した。まず各自で「私」とKのやりとりの中からどのような言動に対してお互いに誤解や疑心がうまれたのかを考察し、それを元に普段の言動について整理し意見交換をした。生徒は普段の言動がいかに相手に誤解を与えるかということに驚いていた。必ずしも自分の予想したとおりに相手に伝わるわけではないことを理解していた。また、これらがKのような結果になる原因になることもあるという事実を改めて気付いたようであった。	【参考資料】 東京書籍 「精選現代文B」

5	神奈川県立	高2	国語	夏目漱石『こころ』の学習。人の死が意味するもの	必履修科目「現代文B」において、夏目漱石作、小説『こころ』を教材として取り扱った。登場人物のKが精神的に追い詰められて自死に至った経緯、また、そのことから周囲の人々に与えた心情の動きを学習した。さらにはKの友人である「私」自身が死を考えるようになった様子から、人間の尊厳・いのちの尊さを考える一助とした。死によって起こされる身近な人の衝撃、苦悩などの心情理解を通して、いのちが持つ意味、重みを理解し、考えさせた。	教科書掲載の小説作品を活用して情報の収集・整理・まとめに取り組んだ。
6	神奈川県立	高1	国語	命に対する様々な考え方を学ぶ	医療技術の発達により、終末期医療は複雑な問題を抱えている。難病のため、激しい痛みに苦しんだ筆者は医療行為を拒否し死を望んだが、家族や医師が苦しむ姿を見て、命は自分一人のものではないと感じた。一方で、フランスのヴァンサン・アンペール事件やアメリカのカレン・アン・クインラン事件は、「死ぬ見込みがなく、激しい苦痛のある患者は、苦しみ続けなければならないのか」という難しい問いを私達に投げかける。命は誰のものなのか。様々な考え方を学ぶ。	「命は誰のものなのか」(柳澤桂子)教科書『現代の国語』数研出版
7	神奈川県立	高3	国語	目にみえない価値観とはなにか	人の命や尊さについて、自分の身近な生活圏内にも思い当たる出来事や出会いはなかったかを振りかえらせた。普段は見過ごしてしまうことにも大切なものはあるということを手紙を通して学んだ。感想文もよく書いている生徒もいた。	(教材) 大江健三郎著『どんな人になりたかったか』
8	神奈川県立	高1	国語	死の定義	「現代の国語」の授業において教科書掲載の「生と死が創るもの」(柳澤桂子)を教材とし、生命科学者から見た「生」と「死」の在り様や捉え方を学び、生命の不思議を考え、これまでの死生観を見直す契機とした。	
9	神奈川県立	高1	国語	『羅生門』に見る極限状態のエゴイズムと生死	犯罪者として他者の物や生命を奪うか、罪なき者として餓死するかという究極の選択を迫るストーリーを読み、文学作品として鑑賞するに留まらない、自己の物語として再認識するよう生徒たちに投げかけた。想像しかできない平安朝の物語ではあるが、もし類似した立場になったらどうするか、どう考えるかを問いかけ、確たる答えは求めず、話し合う場面を複数回設けて意見を交換させた。これはいじめや差別にも通ずる問題であると指摘し、同時に自己を大切にすることの大事さについても解説を行った。	現代の国語の教科書(第一学習社「高等学校 現代の国語」)の教材『羅生門(芥川龍之介)』・電子便覧の平安朝の生活の資料と『羅生門』の文学史上の解説を使用した。
10	神奈川県立	高3	国語	肉親の死を体験した心の悲しみの深さを理解する	宮沢賢治「永訣の朝」の解釈と鑑賞を3時間配当で実施した。作者である賢治と妹のトシの関係について、授業者から十分な説明を行なうとともに、「主体的・対話的な深い学び」の実践として、詩中にみられる表現から「二項対立」である「生と死」「地上と天上」「曇(雨・水)と雪」を題材に提示し、生徒は個人の考察、グループ協議、クラス内発表を学習活動として取り組んだ。講義スタイルの授業とは異なり、積極的に自分の解釈を他者に説明する者がいる一方、他者の解釈を聞くことで新しい鑑賞が出来るようになった者もいた。また、提示した題材が「兄と妹」に結びついているという点にも気づくことが出来た。	教科書:『新 探求現代文B』桐原書店

11	神奈川県立	高3	国語	林京子「空き缶」の読解	3年生の必修である国語の授業において、林京子の「空き缶」を扱った。授業の中では原爆投下までの経緯やその被害の大きさにも触れ、戦争が与える影響について文学の視点から説明した。また、作中の登場人物たちの視点に立ち、命の尊さについて想像力をもって思考した。	・林京子「空き缶」 ・視聴覚教材の活用
12	神奈川県立	高2	国語	「現代詩」から命の大切さを学ぶ	現代文Bの授業において、宮沢賢治の詩集『春と修羅』より、「永訣の朝」を教材に4時間の授業を行った。「妹」の死に直面して悲嘆し、混乱ののちに死者の安らかさを祈る「兄」の思いに触れ、肉親の愛と、人の命が周囲の者にとってどれほど重みのあるものなのかを学ぶ機会とした。生徒の感想には家族の存在と自らも含む命の大切さに気付いたという内容が多くみられた。	本校国語科教員。 現代文B教科書
13	神奈川県立	高1	国語	「イースター島になぜ森がないのか」	SDGsの視点に立ち、人類と生態系の在り方について考察した。SDGsの17の目標に絡め、班ごとに今後の社会の在り方についてまとめ、生徒間で共有しあった。	授業内。 科目担当者により実施。
14	神奈川県立	高2	国語	「永訣の朝」	宮沢賢治の書いた「永訣の朝」は、宮沢賢治が妹トシとの永遠の別れについて書いた詩であり、妹の死が賢治に与えた影響について考え、命の尊さを再確認した。また、「利他の精神」について調べ、生徒自身が自身の生き方について考え、そのことについての作文を書いた。	授業内。 科目担当者により実施。